

## 津幡町の神社と祭神の分析 津幡四町及び横浜編

宮本眞晴<sup>1</sup>

河北潟湖沼研究所河北潟歴史委員会<sup>2</sup>  
〒920-0267 石川県内灘町大清台302

要約：石川県津幡町の中心部である旧津幡四町及び横浜(旧井上村)の神社について調査をおこなった。それぞれの神社の沿革や祭神についての調査記録をまとめた。

キーワード：津幡町，津幡四町，横浜，神社，祭神

## はじめに

萩坂谷・俱利伽羅谷・笠谷に続き，今回は町の中心部である旧津幡四町及び横浜(旧井上村)の神社について考察する。

## 津幡地区の神社・祭神・沿革

以下，それぞれの集落・神社・祭神・沿革について石川県神社誌に基づき，河北郡誌・津幡町史・加賀志徴(巻13)の記述を付した。

「河北郡誌」「加賀志徴」は転記の際，漢字・仮名等を書き換え，適宜，句読点，読み仮名を加えた。

文中の年号に西暦を加えた。

## 1. 太白山神社 旧村社 津幡字 31

主祭神 おおまがつひのかみ  
大禍津日神

由 緒 もと太白山社と称し，清水八幡神社の末社と言われている。明治二年(1869)11月風害により社殿が破壊され清水八幡神社に遷座していたが，同二十年(1887)3月現在地に移転した。昭和三年(1928)10月村社に列す。

【以上 石川県神社誌】

字津幡に在り。無格社にして大禍津日命を祭る。字清水なる清水八幡神社の末社にして，元当村マ13番地に鎮座せしが，明治二年11月風害に罹り，社殿破壊せしを以て，一旦清水八幡神社

に遷座し，後旧地の便ならざるを以て，明治二十三年11月12日今の所に移転せり。

【以上 河北郡誌】

春祭6・21 秋祭9・15

参考 旧の神社明細帳には「太白山神社」となっている。一般にタシロサンとよばれる。もと津幡の太白山に鎮座，明治二年に風害のため清水八幡神社に遷座，同二十三年現地に移転。昭和三年村社となる。本殿背後に神石あり。宮司は加藤治男氏。

【以上 津幡町史】

太白山富士社 文治三年(1187)九郎判官義経主従がひそかに奥州に逃れた折，関守富樫は安宅の関で咎めなかった。これを知った頼朝は怒り，富樫の守護職を解いた。富樫泰家は浪牢の身となり，入道し法名を弘誓と改め諸国を行脚した。その後，本国(加賀)へ帰って息子の春家に家督を継がせたが，父子とも大病に罹った。この時，夢のお告げで河北郡津幡の太白山に富士権現を勧請し，諸堂を建立して田地を寄付した。清水八幡宮縁起に建仁年中(1201~03)当国富樫左衛門富士大権現勧請云々とあり，山伏宝蔵寺系譜に，元久二年(1205)，富樫左衛門佐招請而。為太白山別当，とある。

【加賀志徴】

1 現 津幡町議会議員

2 連絡先 tel.076(288)2409 fax.076(288)2962



写真1. 謎の石燈籠(津幡ギョウド池奥).



写真2. 細石(津幡). 陽石?



写真3. 細石(津幡). 陰石?

### 考察

- ・古文書で津幡は「都幡」「津播多」「津鱒」「津波多」「津旗」などと記されている。
- ・河北郡誌にある津幡マ13番地は、平谷道の南側、倉見との境に近い山中(通称オーリヨサン・御霊山が訛ったものか?)。町役場の土地台帳には「山林・1,487㎡・所有者大白山神社」とあり、公図には「社地」とギリシャ文字の「 $\Gamma$ 」に似た鳥居のマークの書き込みがある。この場所は津幡町福祉センターのホールに掲示してある「冷泉家所蔵 広塚八景図」の笠野神社の位置である。平成19年2月、現地を行ってみた。当該地は市街地を遠く離れた、細い山道を登った場所にある平地で、河北郡誌にあるように津幡宿で一番大きい「津幡」地区の神社が何故こんな参拝に不便な地に存在したのか理解に苦しむ。
- ・「太白山」か「大白山」が正しいのか?以前、太白山神社委員の方から聞いたところによると、現社殿(明治に建立)の棟札は「大白山神社」になっていて、いつの時代からか「太」になったとのこと。
- ・「広塚八景図」にはいくつかの付箋が付いているが、現社殿の位置に「大白山」,「総門川」には「惣門川」,「津幡川」には「小白川」の付箋が付いている。

- ・竹橋の産土神「俱利伽羅神社」は、元の名を「小白川」(こしろしや)に流れる川「小白川」に対し、聳える山を「大白山」と称したらしい。
- ・富士権現の祭神は「コノハナサクヤヒメ(別名吾田鹿茸津姫命)」であるが、今は太白山神社には祀られていない。明治二年風害で社殿破壊の折、清水八幡神社に遷座し、新社殿完成の際、帰ってこなかったものか?
- ・三州神号帳には「富士社」と記載。
- ・野山団地下の日本フィル(株)社宅前の小字は「ダイジングウ」。富士大権現との関係は?
- ・太白台小学校の東南下にギョウド池(農業用溜池)があるが、故老はそこにも神社があったという。津幡地区には太白山神社・富士大権現・諏訪神社の三社があったと思われる。そのうち諏訪神社はJR中津幡駅の北200mほどの諏訪山(すわのやま)にあったことは確実である。ギョウド池の東50mほどの藪に不思議な石燈籠がある(写真1)。



写真4. 神様石(津幡太白山神社).

傘(直径80cm程度). 四角の火袋には日月を彫り, 竿は3面磨き1面は手付かず. 5mほど離れた場所に陶器製の大きな瓶(多分便槽)が埋めてある. 100kg以上もあるそれらを, 住居としては決して適地でない不便な場所へ運ぶ必要があったのか. また, 池の左台地に数個の細石がある(写真2, 3). この意味も不明.

- ・津幡四町最大の集落である津幡には現在, 寺院は無いが元和四年(1618)から慶安二年(1649)まで光円寺(現 南森本・真宗大谷派), 明治十一年(1878)から明治三十九年(1906)まで慶照寺(現 杉瀬・真宗大谷派)があった. また, 遍立寺という寺もあり, 貞享四年(1687)同寺了啓に親鸞絵像が下付されたという.(東本願寺「申物帳」)
- ・北中条の本福寺の本尊阿彌陀如来は, もと太白山神社にあったもので, 光背は黄金製であったので盗まれ, 砺波郡縄池まで運ばれ, 泥棒は光背だけ取り仏像を池に投げ捨てた. その後, 村人に見つけれ, 夢のお告げで北中条本福寺へ安置されたとか.
- ・「津幡町史」に記載のある拝殿後ろの神様石(写真4)は, 社殿に安置しても何時の間にか外の元の位置に戻っていたとか, 社殿に安置すると集落に火事が頻発するとかの伝承がある. なお, 旧津幡地区には石を産出する場所はない.



写真5. 八幡神社.

## 2. 八幡神社 旧無格社 津幡才 13-2

主祭神 おうじんてんのう 応神天皇

由 緒 創立年代不詳. 平家落人伝説地, 平谷の山地に鎮座し清水八幡神社の末社とも伝えられる.

【石川県神社誌】

字津幡に在り. 無格社にして応神天皇を祭る. 字清水なる清水八幡神社の末社なりという.

【河北郡誌】

春祭4・15 秋祭9・15

参考 平家谷伝説地として有名な平谷(現在三戸)の山に鎮座する. 宮司は加藤治男氏.

【津幡町史】

参河守知教朝臣墳 津幡村. 三州志. 知教の墳, 河北郡津幡の北にあり. 今, 里人平谷という. また, 一説に能州二宮辺水白村に塚あり. 土人いう, これ参河守知教の塚にて, 知教この土にて戦死となり.(中略)平谷は津幡村の垣内にて, 津幡より北の方, 山の谷間へ入ること半里ばかりにて, 今家四軒あり. 昔は平家谷と書きたるよし邑人言い伝えり. この民家の側に首塚とて, 大木の松生えたり. 邑民は首塚の松といえり. いにしえは小高き墳墓なりしかど, 追い追い土流れ今は松の根あらわれ, 出根の間より白骨砂土の如く散乱せり. 実に嘆息すべし.

【加賀志徴】

(写真5, 6)



写真6. 平知教の首塚(津幡町平谷)

### 3. 清水八幡神社 旧村社 清水リ 115

主祭神 応神天皇おおなむちのみこと・大己貴命たけみなかたのかみ・建御名方神たけみかたのみこと・  
吾田鹿葦津姫命あたのかあしつひめのみこと

由 緒 伝承に神亀元年(724)の創立にしてえんぎしきない延喜式内笠野神社とも伝えられている。往古は笠野郷七黒村吉倉に鎮座。寿永二年(1183・倶利伽羅合戦の年)大白山に移転,慶長年中(1596~1614)現在地に移転,じょうがん貞観年中(859~76)八幡大神(俗称岩清水八幡宮)・諏訪社を相殿したとあるが定かでない。明治五年(1872)村社に列し翌年現社名に改称。同四十一年(1908)無格社諏訪社と商神として崇敬篤い市姫社を合併。境内に冷泉為広塚(町指定文化財)あり。

【石川県神社誌】

字清水に在り。村社にして大己貴命・応神天皇・健御名方命・葦津姫命を祭る。社伝に依れば当社は神亀元年の勧請にして,延喜式所載の笠野神社なり。往古は本郡笠野郷七黒村字吉倉の間に鎮座し,13ヶ村の惣社なりしが,寿永二年字大白山に移転し,慶長年中津幡駅創立の際更に今の社地に移りたるなりと云えり。相殿八幡大神は貞観年中に勧請せるものにして,里俗之を岩清水八幡社と称し,又相殿諏訪社も同時の勧請なりと云う。本社は代々の国守これを崇敬し,なかならず就中前田利家の如き最も尊信したり。然れども兵燹にかかると数回,神宝記録等悉くために焼亡して伝わらず。社

殿まの構造亦た旧事に似る可くもあらずと雖も,今尚字清水の産土神たりいへど。元久中国守富樫氏の招請げんきゅうに依り,天台宗宝蔵寺の開祖秀慧当社の別当(神宮寺の坊官)となりしより,歴世社僧ありて之に奉仕せしが,明治元年神仏混淆禁止の際復飾して加藤氏と称せり。明治五年相殿八幡大神を以て村社に列し,同六年六月清水八幡神社と改む。同三十九年12月29日神饒饌幣帛料供進神社に列せられ,同四十一年5月8日当字無格社市姫社及び諏訪社合併の許可を得,同年6月22日之を合祀せり。

【河北郡誌】

春祭4・15 秋祭9・15 産業振興祭7・1

参考 八幡神社の外に延喜式内社の笠野神社をも祭ると伝えられている。明治四一年に清水の無格社市姫社・同諏訪社を合併。市姫社は商神として知られる。もと別当宝蔵寺が奉仕,明治になって復飾す。宮司は加藤治樹氏。

【津幡町史】

清水八幡宮 山伏宝蔵寺は当社の坊主なり。所蔵の八幡宮縁起には,天曆年中草創。神名帳の笠野神社(縁起式内社)は当社のことである。その年五畿七道に疱瘡が流行した。その際,石清水八幡を勧請した。

【加賀志徴】

延喜式内社・延喜格式に記された神社。河北郡には十三座あった。社格が権威付けられていた。

#### 考察

・「応神天皇」は八幡,「建御名方神」は諏訪,「吾田鹿葦津姫命」は富士の祭神であるが「大己貴命(大国主命)」は出雲の神であり,どの文書にも祀った記載が無い。また,「市姫社」の祭神が記されていない。ちなみに金沢市下近江町の「市姫神社」は京都市比売宮から分祀したもののだが,比売宮の祭神は,「多紀理比売命」たぎりひめのみこと「市寸嶋比売命」いちすしまひめのみこと「多岐都比売命」たぎつひめのみこと「下光比売命」したみつひめのみこと「神大市比売命」かみおおいちひめのみことで,摂社の祖霊社に「大国主命」

を祭っている。大国主命はほくせん卜占(占い)の神でもある。加藤家の先祖は、利家の末森城への出陣を占った。

- ・津幡地内に「山姥堂」があったが、清水八幡神社由来書に、末社山姥堂本地薬師とある。本地垂迹説で薬師とは、少彦名命か大国主命のことである。
  - ・「建御名方神」は諏訪の祭神であるが、明治期まで津幡すわのやまの諏訪山(中津幡ニュータウンの裏山)に小さな祠ほくらがあったという。
  - ・「吾田鹿葦津姫命」は、本来は大白山富士権現に祀られていたもので、明治期の社殿破壊の際、清水八幡神社へ遷座したまま残ったのではないか? また、「吾田鹿葦津姫命」に市姫の性格は無い。酒造の女神ではあるが・・・
- 清水には2件の酒造家があったが1件は昭和期に廃業。現在は酒米栽培から醸造まで自家生産で行っている酒造家が1件のみ。
- ・「広塚八景」に、北の山裾に「岩清水」、清水八幡神社の参道横に「清水」が描いてあるが、それらが地名の由来。
  - ・真宗大谷派宝泉寺は文明年間(1469～87)創建。

#### 4. 住吉神社 旧村社 庄ワ141

主祭神 綿津見神わたつみのみかみ

由 緒 創立年代不詳。明治六年(1873)村社に列す。

【石川県神社誌】

字庄に在り。無格社にして綿津見命を祭る。明治六年村社に列せらる。

【河北郡誌】

春祭4・15 秋祭9・15

参考 庄の産土神と仰がれ、明治六年村社に列す。宮司は加藤治男氏。

【津幡町史】

此の村は今津幡の市中と成り、能登路の方にて庄町とも称せり(中略)この庄村はいにしえ井

上村といいたる地にて、井家庄とて莊園となりたるより、略称して庄村と呼びたるなるべし。(後略)

白子田、五月田

【加賀志徴】

#### 考察

- ・庄村は以前、西方の低地にあった白子田・千福寺が移転して町並みを形成した。河北潟満水時は水損所であったという。
- ・庄の名は「亀の尾の記」によると瀬尾の約音で、川の瀬の意味から津幡川に由来するとか。
- ・住吉は漁業・航海の神。庄は漁業や、舟運に関係する人たちが多くいたのか? 川尻の住吉神社は、庄の神が石に化し、津幡川を流れる蕪の葉に乗って着いた所に建造したもの。庄の住人たちは帰社を願ったが神は帰りがたらず、ここに社殿を建てた。3月8日の祭りは「蕪青祭り」という。川尻水門の神。

#### 5. 白鳥神社 旧郷社 加賀爪ヌ1

主祭神 日本武尊やまとたけるのみこと

由 緒 古く白鳥明神と称し、清和天皇貞観十八年(876)7月、神位を従五位下に昇叙せられた国史見在社にあてられる名社で、広く井上庄の総社として仰がれ、特に雨乞の靈験をもって知られ、嘉永七年に奉納せられた雨乞報謝絵馬が現存する。後に加賀爪社と称したが明治十五年(1882)7月現社名に復称、昭和七年1月郷社に列す。

【石川県神社誌】

字加賀爪に在り。村社にして日本武尊を祭る。仲哀天皇元年うるう11月、越の国白鳥を獲て之を献る。依りて詔して其地に日本武尊の神靈を祭らしめ、白鳥の神と号せしめらるという。此即ち当社に奉祀する白鳥大明神なり。清和天皇貞観十八年7月21日神位を進めて従五位下を授け給う。其後加賀爪社と称せしが、明治十五年7月7日今の社号に改め、同三十九年12月29日神饌幣帛料供進

社に指定せらる。

【河北郡誌】

春祭 4・15 秋祭 9・15

参考 白鳥明神と称せられ、貞観一八年に正六位上より従五位下を授けられた国史見在社に充てられている。明治十五年に社名の加賀爪社を現社名に改称、昭和七年に郷社に昇格した。雨乞の靈験をもって知られる。宮司は加藤治男氏。

【津幡町史】

仲哀天皇、天下に令して白鳥を獲しめ給うに、越の地より之を獲て献る。故に詔してその地に於いて彼の皇子神霊を祭祀し、白鳥神と号す。これ即ち加賀爪村の本居と斉祀る白鳥大明神なり。

倭建命の故事 加賀国来因外覽に、国俗古来言い伝う。日本武尊東夷征伐の後、この国に到る。時に国人、尊の軍に馳せ加わりて、東夷征伐の偉勳を賀す。加賀の名義ここに防まる。今の河北郡加賀爪、即ち尊の神旌(旗)を立て給いし遺地なりという。

【加賀志徴】

考察

- ・仲哀記に、ヤマトタケルの子、仲哀天皇が父の陵墓の池に放つため、越の国から4隻(4羽)の白鳥を献上された。この時代、越は三越に分かれていないのでこの加賀の地と能登、越中、越後であったのだらうとある。加賀の名がこの地より興ったとすれば楽しい。
- ・雨乞いについては、大正十三年(1924)9月加賀爪区が作成した「国史現存 白鳥神社史料」という記録がある。
- ・真宗大谷派弘願寺は観応元年(1350)鳥越に創建。長享二年(1488)の一向一揆では、吉藤専光寺、磯部聖安寺、木越光徳寺と共に「四ヶ寺の大坊主」として富樫攻めの中心的役割を果たした。天正年間羽咋郡堀松に移転。慶長年間

(1596~1614)金沢に移転。慶長十四年(1609)現在地に。同派徳願寺は文明年間(1469~86)津幡村に創建。元和年間(1615~24)弘願寺前に移転。昭和40年河川改修のため現在地に。同派妙楽寺は永世年中(1504~21)五反田にて創建。明治十二年(1879)軍加町へ移転。同派浄真寺は文明年間(1469~86)能瀬村にて創建。明治十二年(1879)現在地へ移転。

## 6. 野田八幡神社 旧無格社 横浜イ 59

主祭神 ほんだわけのみこと おきながたらしひめのみこと おおさぎのみこと 菅田別尊・気長足姫尊・大鷦鷯尊・たけしうちのすくね 武内宿弥

由 緒 もと延喜式内小浜神社境内摂末社にして天正十四年5月(1586)前田利家小浜神社の摂末社数十社を再興修理せらる。翌十五年8月小浜神社境内より当地へ移転造営す。明治六年(1873)8月石川県より小浜神社附属社に取りきめらる。

【石川県神社誌】

八幡神社 字横浜に在り。無格社にして気長足姫命・菅田別命・大鷦鷯命・武内宿弥を祭る。元と内灘村なる小浜神社の境内にありしを、天正十五年7月ここに鎮座せりという。

【河北郡誌】

春祭 4・15 秋祭 9・15

参考 もと正八幡宮とよばれた。小浜神社附属社。昭和46年に社殿を新築す。宮司は斎藤政紀氏。

【津幡町史】

考察

- ・「仮名付帳」には、北中条の枝郷という。
- ・文化8年(1811)の産物として、麻苧(からむしのこと)・布・絹・藍・菜種など。
- ・真宗大谷派普念寺は天文年間(1532~55)中須加にて創建。延宝二年(1674)現在地に移転。
- ・神社名に付く「野田」は横浜のこあざ小字。

## 祭神の出自と性格

以下に、これまで挙げた6坐の神社の祭神と性格について分析する。50音順に示し、祭神を同じくする全国の有名神社も記した。

あまつかみ くにつかみ 天神族	たかまがはら 高天原系の神
てんそん 天孫族	出雲系の神
人物神	神武天皇以後の系統
	上記以外の歴史上の偉人

### 1. 吾田鹿葦津姫命

清水八幡神社（清水）

天神族・(別名)木花咲耶姫命・木花之佐久夜  
毘売命・神阿多都比売命・豊吾田津媛命・  
神吾田鹿葦津姫命・酒解子神・大山祇命(別  
名 酒解神)の末娘・瓊々杵尊と結婚・海幸  
彦・山幸彦を産む・神武天皇の曾祖母・花  
に例えると「桜」・山に例えると「富士山」  
というほどの美人。

- ・酒造・山火鎮火・五穀豊穰・養蚕・良縁・安産の女神。
- ・静岡県富士宮市・浅間神社 鹿児島県霧島町・霧島神社

### 2-1. 応神天皇

八幡神社（津幡・平谷）・清水八幡神社（清水）  
天孫族・(別名)品陀和気命・誉田別尊・  
大軯和気命。

ヤマトタケルの息子である第14代仲哀天皇と神功皇后の子。第15代天皇となる。母・神功皇后（ときには父・仲哀天皇や武内宿弥）と共に全国に2万とも3万ともいわれる八幡神社の祭神。（1位は稲荷神社の3万2千社）

百済や新羅から渡来人を受け入れ、新しい文化を招来した天皇。

- ・武運・交通安全・開拓・航海などの神
- ・大分県宇佐市・宇佐八幡宮 京都府・岩清水八幡宮 神奈川県鎌倉市・鶴岡八幡宮

### 3. 大鷦鷯尊

野田八幡神社（横浜）

天孫族・サザキは鳥の「みそさざい」とも「かささぎ」ともいう。世界最大の陵墓の第16代仁徳天皇（難波天皇）の別称。津幡では中橋・八幡神社や金沢市木越町・宮保町の八幡神社の祭神。在任中、淀川の治水工事をして、湿地だった大阪平野を干拓したという。

「若宮八幡神」ともいう。

- ・治水・干拓の神
- ・神奈川県鎌倉市・鶴岡八幡宮

### 4. 大己貴命

清水八幡神社（清水）

地祇族・(別名)大穴牟遲神・大国主命・葦原色許男神・八千戈神・宇都志国玉神・大物主命。

父・天之冬衣神，母・刺国若比売命。因幡の白兔の伝説で知られる「大黒様」のこと。

多くの妻と結ばれた艶福家。越の国（今の新潟県）の沼河比売命との間に建御名方神が生まれた。少彦名命と一緒に日本の国造りを行い、のちに天孫族に国譲りする。

上記の「ヌナカワ」は万葉集に「沼名河の底なる玉・・」と登場し、実際に新潟県の姫川上流で、翡翠の産地が発見された。これは越の国と出雲の関係を表わしている。

- ・国造りの神（文化神）・農業・商業・医療・縁結びの神。卜占の神。
- ・島根県大社町・出雲大社 石川県羽咋市・気多大社

### 5. 大禍津日神

太白山神社（津幡）

天神族・(別名)瀬織津媛神。

火傷で死んだイザナミを尋ねて行った黄泉の国から逃げ帰ったイザナギは、筑紫（九州のこと）の日向（宮崎）の橘の小門の

あわぎはら けが みそ  
安波岐原で、穢れを洗い落とすため禊ぎを  
したときに、水中に洗い落とされた穢れか  
ら生まれた神。祝詞などの呪いの言葉に関  
する神で、神祭りのとき、神に対して間  
違った言葉を奉じると災厄をもたらす。正  
しく祀れば凶事の災難から守護する力を下  
さる神。大熊の甲斐崎神社の祭神でもあ  
る。

- ・疫病除け・招福の神
- ・愛知県津島市・津島神社

## 6. 氣長足姫命

野田八幡神社（横浜）

地祇族・（別名）息長帯比売命・大帯姫命・  
神功皇后

夫の第14代仲哀天皇とともに九州の熊襲  
征伐に出たが、夫は敵の矢で死亡した。神  
功皇后は兵を率い、朝鮮の新羅を征伐す  
る。帰国後生まれたのが第15代応神天皇。

- ・子授け・縁結び・安産・厄除けの神
- ・大分県宇佐市・宇佐八幡宮 福井県敦賀市・氣比神社

## 7. 武内宿弥

野田八幡神社（横浜）

地祇族・父・比古布都押之信命、母・山下影  
日売。第12代景行天皇より成務、仲哀、応  
神、仁徳天皇まで五代の天皇に仕え360歳  
まで生きたといわれる。

- ・延命長寿・武運長久・厄除け・商売繁盛の神
- ・埼玉県日高市・高麗神社 福井県敦賀市・氣比神社

## 8. 建御名方神

清水八幡神社（清水）

地祇族・大国主命の子。高天原から国譲りの交  
渉に来た建御雷之男神と争い、破れ、科野  
（信濃）の洲端（諏訪）まで追われ逃げた。

- ・土木・開拓・農耕・養蚕の神
- ・長野県諏訪市・諏訪大社上社 長野県下諏訪町・諏訪大社下社

## 2-2. 菅田別尊

2-1 応神天皇のこと

## 9. 日本武尊

白鳥神社（加賀爪）

地祇族・（別名）倭建命・倭男具那命・小碓命。

九州の熊襲、東方の蝦夷を征伐。帰途、伊  
吹山で病に罹り、三重で死ぬ。死後白鳥に  
なって飛び去る。古事記・日本書紀の悲劇  
の英雄。

- ・出世・開運・金運の神
- ・名古屋市・熱田神宮 敦賀市・氣比神宮

## 10. 綿津見神

住吉神社（庄）

天神族・イザナギが禊ぎをしたとき生じた神。

水底で洗い清めた時生まれたのが底津綿津  
見神・中層で中津綿津見神・水上で上津綿  
津見神が生まれた。綿津見三神。同じく三  
層で生まれたのが底筒之男命・中筒之男  
命・上筒之男命。住吉三神。

- ・航海・水運・漁業の神。
- ・神戸市垂水区・海神社 福岡市東区・志賀海神社

## おわりに

神道には、宗教に必須の教祖がない・教義が  
無い・教典がない・広める組織が無い。強いて教  
義といえば、「清浄」のみである。

十数年、各地の神社を廻って不思議に思ってい  
たことは、この地方の神社の境内に中世の墓であ  
る五輪塔、宝篋印塔や梵字を彫った板碑を多く見  
る。

神道では「死」を穢れと見る。「欣求浄土・  
厭離穢土」。

この地方の神職は、明治初年の神仏分離の際、  
僧職を兼ねていた者が神職に転職したケースが多  
い。先日、明治以前から僧職を兼務せず、ずっと  
神職であった神社の宮司に話しを聞く機会があっ  
た。





写真7. 冷泉為広の塚.

彼の話によると、以前、僧職兼務であった神主は、集落<sup>えいこう</sup>にあって、今は回向してもらえないそれらの石塔を、自分の管理する神社境内に集めたとか。だから自分の管理する神社の境内には石塔は無いと語っていた。

石塔は俱利伽羅谷・笠谷、種谷・英田地区に多く、今回の津幡地区には全く無く、萩坂谷や井上などの平野部には少ない。

以前種谷にある津幡町上矢田愛宕神社の氏子が明治初期、石川県外に旅するためのパスポートとしての「氏子証明」の杉の木札を見たことがある。江戸期は檀那寺の住職が信徒のため証明書を出す制度があったが、そのとき見たのは愛宕神社の神職が署名捺印したものだった。

清水八幡神社東にあった「冷泉為広の塚(広塚)」について

冷泉為広 (1450 ~ 1526)

冷泉家は歌人藤原定家をその祖とし、代々和歌の名家として知られてきた。冷泉家は定家の孫<sup>ためすけ</sup>為相が興し、後に為之<sup>ためゆき</sup>が上冷泉家を、持為<sup>もちため</sup>が下冷泉家を興した。

当代一流の歌人冷泉為広は宝徳二年(1450)上冷泉為富の子として誕生した。為広は応仁の乱で荒れる京都を離れ、延徳三年(1491)三月頃、前室町幕府管領細川政元とともに越前金津から入海(北潟のこと)、吉崎から橋(加賀市)・串(小松市)笠間・松任を経由し米泉<sup>すざききょうがく</sup>の洲崎慶覚(加賀一向一揆の指導者の一人)の館に泊まった。その後、増



写真8. 津幡町教育委員会による解説板.

泉、石坂を通り、犀川を徒歩で渡り、浅野川の橋を渡り森本、太田、竹橋を経由し俱利伽羅を越え、越中にはいった。(冷泉為広越後下向日記)

永正5年(1508)為広は突然出家し(法名宗清)、地方を巡歴した。

永正十四年(1517)為広は能登七尾城の畠山氏の招きを受け、津幡を通り七尾へ赴いた。翌十五年(1518)信濃善光寺参詣<sup>ところぐちみなと</sup>に所口湊(七尾港)から小木湊(能登町)を経て、直江津へついでいる。大永六年(1526)為広・為和父子が畠山氏の招請で七尾を再訪し、その年の七月二十三日に七尾で没した。そのことは「今河為和集」等で知られていたが、更に、冷泉家の時雨亭文庫に、為広の自筆の「能州下向日記」発見されて、初回(1517)の七尾行の様子が詳細に知れるようになった。息子為和は天文十年(1541)畠山氏の招請で七尾を再訪している。畠山氏は上杉謙信により天正五年(1577)滅ぼされた。

(写真7, 8)

津幡地区には大坪の金属神を祀る「金山彦神社」や竹橋の陶磁器の神を祀る「俱利伽羅神社」などの特徴ある神社は見られない。

### 参考文献

- 「石川県神社誌」昭和51年(1976)10月発行 石川県神社庁
- 「石川県河北郡誌」大正9年(1921)11月発行 石川県河北郡役所

「加賀志徴」昭和12年(1937)9月発行 石川県図書館協会

「津幡町史」昭和49年(1974)3月発行 津幡町役場